



相互承認

著者	長瀬 聡子
雑誌名	教育を考える一言
巻	3
ページ	51-51
発行年	2013-06
URL	http://hdl.handle.net/2241/00124027

相互承認

1. 教育を考える一言

「まじめ」たれ

2. 背景

『悩む力』（姜尚中、2008）によると「自分と他者とを結ぶ回路をどのように作れば、共通の世界像を形成できるか」という問題が多くの人を悩ませるようになった背景には、近代科学や合理主義の急速な発展があるそうです。「われわれ」だったものが「私」という単体になり、「個人の自由」をベースとした「個人主義」の時代が全盛になりました。このような時代には、自我は自らを確立しようとして、または守ろうとして肥大化していかざるをえません。自我が肥大化していくほど、自分と他者との折り合いがつかなくなります。自我は自尊心でもあり、エゴでもあるので、自分を守りたいし、主張したいという気持ちが強く起こります。しかし他者にも同じように自我があり自分を守りたいので、手も足も出なくなってしまいます。

自我というものは他者との「相互承認」の産物です。承認してもらうには、自分を他者に対して投げ出す必要があります。他者と認め合いたいとき、夏目漱石が『心』で教えることは、「まじめ」ということです。「先生」の秘密を知ろうとする「私」に、「先生」は「あなたは腹の底から真面目ですか」と尋ねます。この「まじめ」という言葉について姜尚中は、「中途半端」の対局にある言葉ではないか、と言います。まじめに悩み、まじめに他者と向かい合うところに、何らかの突破口があるのではないかと彼は考えます。中途半端になげてはいけない。ましてや自我と自己中心をはき違えて、ただの「私」の世界を主張しているようでは、なおさらダメなのです。

3. 考察

今後の身の振り方に悩み、自分の在り方を模索していたとき、自分の不器用さを「かつこ悪く」感じ、自分と他者とに向き合うことに窮屈さを感じていました。そのようなときに、自我は他者との相互承認の産物であることと、他者と認め合うために大切なことの一つには、「まじめ」があるだろうという視点を得ました。中途半端に投げ出さず、「まじめ」に悩みぬくことが肯定されたとき、不器用であることの「かつこ悪さ」と折り合いをつけることができたように思います。自我は他者からの承認が必要で、他者もまた同様であることを考えれば、「人」と向き合っていくことは決して窮屈なだけではないはずです。自分を生きるためには他者と認め合うことが必要だからこそ、大いに関わりを求めて、自分の不器用さと「まじめ」に格闘していくことも一つの在り方のように感じます。

引用文献

姜尚中『悩む力』集英社、2008年

夏目漱石『漱石全集』岩波書店、1993-1999年